

ずいそう

私たちのダイビング歴

加藤 謙



今年も寒い冬がやってきました。今回の「ずいそう」では皆様方に季節を少し戻して頂き、陽光に煌めく海原、白い砂浜、穏やかに打ち寄せる波、心地よい風などを思い浮かべて頂きながら私たちのダイビング歴とその魅力についてお話しさせていただきます。

ダイビングを始める年代は当にまちまちです。必ずしも若い世代とは限りません。60歳前後で始められる方も大勢いらっしゃいます。それはダイビングの秘訣が呼吸法にあるからです。水面から水中へ、その逆に水中から水面へと体に羽織ったBC（BUOYANCY COMPENSATOR：浮力調整装置）の空気量を調整すると共に、腹式呼吸により肺の空気を出し入れすることにより浮沈します。慌てずゆっくりとした自然な呼吸を心がけることが大切です。このように呼吸法が基本であることからある程度の体力があれば、いつからでも始められます。また、水泳が苦手だという人は、沈んでしまうという恐怖心があると思いますが、ウェットスーツによる浮力があるため沈むことはありません。むしろ、耳抜きと併せて如何にスムーズに沈むかを練習することになります。但し、海の中を自分の目で直接見てみたいという強い欲求が必要です。この欲求がない方は体力があってもダイビングには不向きだと思います。因みに私がライセンスを取得したのは40歳（1991年、平成3年）の時です。

私は東亜建設工業株式会社に入社以来、専ら作業船の仕事に従事していた関係から、海上からしか海を見ていませんでした。そういう私が40歳で何故ダイビングを始めたのか。それは、当時の上司から「陸上の多機能作業機であるバックホウを水中に入れ、水中で自在に作業することができる水中作業機械、所謂、水中バックホウを造る。ついては水中に潜るべし。」とお達しを受けたからです。それまで自分を含め、ダイビングとは全く縁のない3人で、海に行けばビキニのお嬢さん方を堪能できるという上司の甘い誘惑につられてライセンスを取ることになりました。これがダイビングを始めたきっかけで、水中を体感すること、水中でものを考えることが目的であり、この時には美しい海中を堪能する、色々な海生物を見るなどの余裕は全くありませんでした。

ライセンス取得後、水中バックホウによる捨石均し作業の運転状況を調査するために石垣島で潜りました。オペレータ（潜水士）の後ろに設置されたバーに掴まり均し作業を体験したのですが、若いオペレータが格好いいところを見せようと右に左に旋回するものですから、体が浮き上がり振り落とされそうになったことを覚えています。また、同じく石垣島で養殖されているサンゴの実態調査をしました。その他にも、伊豆の海洋公園における透視度（海中の水平方向）調査、茨城県の常陸那珂港築造中の波浪による底質の舞上がり調査などをしました。これらの調査は、当に自分の体を使っての調査でしたので、陸上での聞き取り調査とは違った臨場感のある報告書が作成できたと思っています。5年間で約50回の調査・訓練をしましたが、やはり潜水調査はプロのダイバーに任せるのが安全確実、自分のような素人がプロの領域までに技量を高めることはとても無理と分かり、自らが調査潜水することから撤退することにしました。また、この頃から私の仕事における興味も水深30m迄の浅海域から1000m超の海洋に向かっていました。

しかし、自らが潜り、自身の目で水面下の世界を直に見たという体験は、プロのダイバーの水中活動を理解する上での貴重な体験となると共に、その後の私たちにとって大切な趣味へと繋がりました。

妻は泳げませんでしたが、私が購読していたダイビング雑誌を見て、自分の目で海の中を見たいという強い欲求に駆られ、更に、陽光に照らされる真っ青な海、白い砂浜に打ち寄せるさざ波、その丘に建つリゾートに魅せられ45歳のときにライセンスを取得し、一緒にダイビングを始めることになりました。

最初は心配の連続でしたが、ある時、世界屈指のダイビングポイントであるパラオのブルーコーナに潜りました。このポイントは大物と呼ばれるグレイリーフシャーク等のサメ類、ナポレオン、たまにはジンベイザメなどが出没することで有名ですが、もう一つ有名なのが、びっくりするくらいの激流が時によって出現することです。たまたま私たちが潜ったときがその時で、コーナの岩に必死にしがみついて大物の出現を待つことになりました。びっくりするくらいの激流とは、

水中で呼吸するために口に咥えているレギュレータを流れの方向から僅かでもずらしてしまうと呼吸のための排気口から海水が逆流し、たちまち口の中が海水で満たされてしまう位の流れをいいます。よくあることですが、この時は結局何も出ませんでした。しかし、妻がこの激流に一人で耐えたことから私の心配は解消し、それ以後は二人でダイビングを本当に楽しむことができるようになりました。

パラオには他にも有名なポイントが沢山あります。4つの縦穴からなるブルーホールというスポットに潜ったとき、エントリーした途端に体長1.5m程度のブラックフィンバラクーダの大群に囲まれ、目と目を見合わせながら潜った記憶が鮮烈に残っています。

フィリピンではマニラ市内から陸路約3時間のアニラオ (Anilao)、セブ島のマクタン空港から陸路約4時間のリロアン (Liloan) に行きました。この両スポットは共にマクロ天国 (ハゼ類、ウミウシ等の小物) で、初心者から上級者まで存分に楽しめます。日本の海では個体が小さいものでも、ここでは大きくのんびりと育てているので写真撮影にはうってつけです。アニラオのキルビスロック (Kirb's Rock) というポイントでは、上皇陛下が発見され、上皇后陛下が名前を提案されたアケボノハゼを見ることができます。水深が43mと深いため、滞在時間1分 (減圧症を回避するため。) という限られた中での写真撮影となりますが、スリル満点で、深いもの好きのダイバーには堪らないポイントです。私はこれまで2回トライし、共に写真撮影に成功しています。成功した最大の理由は、水温が28~29℃と暖かく、ストレスを感じることなく潜れたからです。

ダイビングは通常、ボートでポイントまで行きそこで潜る、所謂ボートダイビングのスタイルが一般的ですけれど、ダイビングを存分に味わうにはクルーズ船に乗り、ポイントを巡りながらのダイビング、所謂ダイブクルーズ (食べて潜って寝て潜って…) がお勧めです。私たちが乗船したダイブクルーズを次に紹介します。タイのプーケット港を発着港とするアンダマン海のシミラン&リチュエローロッククルーズ (7日間)。ここでは毎日マンタを見たお陰で、もうマンタは結構ですという位でした。モルディブ共和国のマレ港を発着港とするモルディブクルーズ (8日間)。この狙いは毎日出るジンベイザメとのシュノーケリングです。日本人とロシア人のグループとなりましたが、フィンをつけていても人の泳力ではとてもジンベイザメに追いつけるものではなく、日本人グループは早々に諦め2匹目以降は船上見学、ガタイの大きな口

シア人グループは毎回果敢にトライしていました。オーストラリアのケアンズ港を発着港とするグレートバリアリーフクルーズ (7日間)。自分の背丈ほどもある巨大なジャイアント・ポテトコッド (ハタの一種) やサメの餌付けを見ることができます。サメの餌付けはダイバー全員が横一列に岩壁に囲まれ、眼前に吊されたドラム缶に入っている餌をサメに食べさせるというショーで、集まってきたサメの数の多さ、餌にかぶりつく様子、すごい勢いで餌を引きちぎる様子、サメ同士の餌の奪い合いなど、ここでしか見ることができない圧巻のショーでした。

日本でのダイビングスポットの紹介は誌面上の都合で割愛させていただきますが、世界の海に誇れる素晴らしいスポットがいくつもあります。関東近郊では、伊豆半島の東側と西側、伊豆諸島、小笠原諸島など。沖縄県では那覇泊港から高速ボートで1時間余りの慶良間諸島、久米島、石垣島、西表島、宮古島など。鹿児島県では奄美大島、沖永良部島、与論島などで、私たちも存分に潜ってきました。

私たちの記念すべきダイビングは、妻が600本を達成したサイパンにおける2013年 (平成25年) 1月8日の2本目です。サイパンへは直行便があったお陰でよく潜りに行きました。馴染みの日本人ガイドがオブジャン (OBJAN) というポイントで小石を集め、水底の光輝く白い砂の上に600という数字を描いてくれました。最高の記念碑となりました。私の記念すべきダイビングは、2019年 (令和元年) 10月14日の1本目、石垣島の「桜口」というポイントで700本を達成したことです。

このように私たちのダイビングは長続きしましたが、その秘訣は、夫婦で趣味が同じであることに加え、毎日のWalkingにあったように思います。それぞれのペースで心臓にある程度の負荷をかけるような速歩でのWalkingです。私は、現役時代は出勤前に毎日5~7km、現在は10kmを100分~120分程度のペースで、月間200km超を目標にしています。Walkingだけを目的とってしまうと三日坊主に終わってしまいますが、ダイビングを続けるためには体を鍛えなければという強い欲求があれば長続きします。

最後に、ダイビングの魅力は何といっても水中における浮遊感であると思います。この浮遊感は宇宙か水中でしか味わえません。水中では豊かな海生物が私たちを迎えてくれます。これからも自然を大切にすると共に、健康で、体を鍛え、ダイビングを楽しんでいきたいと思っています。次の目標は1000本達成です。